

海外では一部の遺伝性のALS患者に対する遺伝子治療も、病状の進行を止める効果が期待されています。早期診断、早期治療ができる大半の日常生活は困らない状態にできる可能性があり、懸命に治療法を研究しています。診断をくだした患者さんには自分が捨てられない感じでもらうことが、医師としての願いです。

——神経内科が果たす役割は。

高齢社会に伴い、脳卒中やアルツハイマー病などの神経疾患に対する医療ニーズが増大しています。これらの疾患にかかる患者さんは、介護対象者となることが多いのが特徴です。そこで例えば、脳卒中後の痙攣がある患者さんにボツリヌス治療とりハビリテーションを併用するなどします。その結果、要介護度5が4になるとしたら、医療経済への貢献と言えまし、ご本人の尊厳の回復にもつながります。

ALSの治療法の開発に成功し、呼吸器の筋肉だけを残すことができるようになれば患者さんは人工呼吸器をつける必要がなくなります。そうすると、患者さんが社会で果たすことができる役割が大きくなります。その結果、「障害は個性だ」と、社会で受け入れられるよ

医師として

ベンシルベニア大学で一冊の書籍に出合いました。後に私が監訳した『ウイリアム・オスラー——ある臨床医の生涯』(メディカルサイエンスインターナショナル刊)です。スペイン風邪が大流行した1919年に70歳で亡くなつた偉大な医師です。の中に、スペイン風邪にかかった14歳の少女を見取ったこんなエピソードが紹介されています。ワクチンも治療法もない中で、オスラーは1ヵ月後に亡くなるまで1日2回も見舞い訪れ、さまざまなお話をした。そのことで「(少女は)なにもかもすべて知つてしまつたが、不幸ではなかつた」と、その少女の母は述べています。

聖路加病院の元医師、日野原重明先生もオスラーをメンター(師)とされ、日本オスラー協会会長を長らくされていました。私にとってのメンターは、先にあげた亀山先生とオスラーです。徳島大学神経内科教室のホームページには、オスラーや日野原先生の言葉、それに自分自身のこれまでの経験をもとに「世界で一番すばらしい臨床医になる君のために」というメッセージを掲載しました。医師として、科学者として、社会人として、こうあつてほしいという思いを込めています。

——自線の高さを同じにして、患者に接することが大切ですね。

「患者は何に困つて来ているのか」「それに対して何ができるのか」「そうすれば患者の将来残りの人生に何が起こるか」。その原則に則れば、患者さんとご家族が現実を受け止められるか判断して、少しずつ説明するというのは至つて当然のことです。

——若い医師たちに望むことは。

「医学はサイエンスとアート(わざ)である」というオスラーの名言も医学の教科書に見ることはほとんどありません。iPS細胞や遺伝子治療など華々しい成果が喧伝されていますが、サイエンスの進歩のみに注目が集まり、医のアートが軽視される傾向にあります。オスマーチが行っていた臨床を垣間見ると、これらの医師像、あるべき姿が見えてきます。これからさらに高齢化が進み、不治の病や終末期を診る機会が増えます。オスラーを勉強する若い医師が増えてほしいですね。

実を受け止められる状態を見極めて、少しずつ告知をするというアプローチをとりま

す。ですから、丁寧に症状や治療方針を説明し、疾患に対して理解を深めてもらうことを心がけています。日本では「インフォームドコンセント」が使われ過ぎて言葉だけが一人歩きしているかのような印象がありますが、私はウイリアム・オスラーが語った3原則こそが重要だと思っています。



関西脳神経筋センターとして、脳神経内科220床、脳神経外科35床、整形外科35床など、神経難病では全国最大規模の診療の実績がある。パーキンソン病センター、多発性硬化症センター、てんかんセンター、脊髄・脊椎外科センター、リウマチ・関節センターの疾患センターを擁し、診療科や内科・外科の枠を越えて最新・最善の医療を提供し、神経変性・神経免疫では最先端の診療・研究が行われている。

梶龍兒(かじりゅうじ)院長の経歴

臨床神経学、神経生理学、ジストニアの病態生理

1954年	兵庫県姫路市生まれ
1979年	京都大学医学部卒業
1979年～1981年	東京都養育院病院で内科研修
1981年～1985年	京都大学大学院医学研究科
1985年～1986年	米国ペンシルベニア大学付属病院臨床フェロー
1986年～1987年	同客員教授
1987年～1988年	米国レイジアナ州立大学メディカルセンター助教授
1988年～1991年	京都大学医学部神経内科助手
1991年～2000年	同講師
2000年～2018年	徳島大学医学部附属病院高次脳神経診療部教授
2018年～現在	徳島大学特命教授も兼任

所属学会

日本神経学会名誉会員
日本臨床神経生理学会名誉会員
日本ニューロリハビテーション学会理事
日本ボツリヌス治療学会代表理事
世界神経学連盟筆頭副理事長(～2021)
フランス神経学会名誉会員
米国神経学アカデミー・フェロー